

第1章 魂のサイズ

魂の破片

あれは一九九一年の初め、父が亡くなってふた月ほどした陰鬱なある日のことだった。両親の家のキッチンで、一五年あまり前に撮られた父の写真、端正で素敵な父の写真の前にして、母がわたしにこう言ったのだ。暗い調子で。「この写真にいつたいどんな意味があるの？ 何もないわ。ただの紙切れ、黒い印がそこに付いただけのただの紙切れでしかない。こんなものは何の役にも立たないわ」。その悲しみに満ちた冷たい母の声にわたしは驚き、立ちすくんだものの、直観的に母に同意できないと感じた。でも、父の写真をどのように考えるべきか、わたしの考えを母に伝えるすべを思いつかず杳然とした。

そのときの感情の高まり、まさに魂を探索するなかから、わたしは一つの喩えに思い至った。もしかすると母にわたしの考えをうまく伝えることができて、しかもいくばくかの慰めを与えることができるかもしれない喩えを。わたしは母にだいたいこんなふうに語った。

「ほら、居間にシヨパンのエチュード集の楽譜があるでしょう。あれだつてどのページもみんな黒い印のつい

た紙切れでしかない。薄っぺらでひらひらして。パパの写真と同じだ。でも、考えてみて。その紙切れは世界中の人々にもう一五〇年ものあいだ大きな力を与えてきたんだ。あの薄っぺらな紙切れの上の黒い印のおかげで、何千何万もの人々が計り知れない長い時間ピアノの鍵盤の上で複雑なパターンに従って指を動かして、言葉にできないほどの喜びと深い意味をもった音を生み出してきたんだ。そしてそのピアニストたちは、フレデリック・ショパンの心の中に渦巻いていた深い感情を何百万もの人々に伝えてきたんだ。ママもぼくもそのなかに入るだろう。それはぼくたちみんながショパンの心の内面、頭の中にあつた生の実感、フレデリック・ショパンの魂の深奥に、たとえ微かにでも触れることを可能にしてくれたんだ。紙切れの上の黒い印はいわば魂の破片、バラバラになってしまったフレデリック・ショパンの魂の残された断片にほかならないのさ。紙の上の印の作るパターンは一つひとつが他の人間の内的体験の小さな小さな断片、悩みや喜び、深い情熱や葛藤をぼくたちの脳の中に一つひとつ蘇らせる力をもっている。たとえ部分的にせよ、もし自分がその人になったとしたらいったいどのように感じるのかを教えてください。そして多くの人々がその人に強い愛情を感じるんだ。それとまったく同じように、棚の上のパパの写真を見ると、パパをよく知っているぼくたちにとっては、パパの笑顔や優しさの記憶から、ぼくたちの中に残っているパパについての最も中心的な表象が脳の中に呼び起こされる。パパの魂の小さな断片がダンスを始める、ただしパパ自身ではない別の人の脳の中で。ショパンの練習曲の楽譜と同じように、あの写真は亡くなったパパの魂の断片なんだ。だからぼくたちが生きている限り大切にしなければいけないよ」

実際にはこんなにうまくは言えなかったけれども、あのとき確かにこんな内容のことを母に言った。母の写真に対する気持ちにどのくらい影響を与えたかはわからない。⁽¹⁾しかしあの写真は今でも同じ場所、母のキッチンのカウンターの上にある。そしてその写真を見るたびに、わたしはこの会話のことを思い出す。

トマトであるとはどういうことか？

わたしはトマトを刻み、むしゃぶりつく。何の罪の意識も感じないで。新鮮なトマトを食べたからといって寝覚めが悪いことなどない。わたしが食べたのはいったいどのトマトだろうとか、トマトを食べることによってトマトの内なる光を消してしまったのではないかとか決して思い至らない。ましてや、刻まれるトマトが皿の上でどんなふうに感じただろうと想像することに意味があるなどとは思ひもしない。わたしにとってトマトは欲望も魂も意識ももたない存在であり、その「身体」⁽²⁾に対して好きなように何をしようと一切苛責は感じない。そもそも、トマトには「身体」しかない。したがってトマトに「心身問題」は当てはまらない（読者のみなさんもこれにはまったく同感と言ってもらえるのでは）。

わたしは蚊をつぶすことにも苛責は感じない。しかし蟻はなるべく踏みつぶさないようにする。そして蚊以外の昆虫が部屋の中に入ったときには、たいてい殺すよりは捕まえて外の茂みに逃す方を選んでる。鶏肉と魚はときどき食べる（注意——今はもうこの通りではない。本章追記参照）。しかしもう何年も前に、哺乳類の肉を食べるのはやめた。ビーフはダメ、ハムもダメ、ベーコンもダメ、缶詰もダメ、ポークもラムもダメ——ぼくは結構です。そうは言っても、BLTサンドや肉がこんがり焼けたハンバーガーの味は今でも好きなことに変わりはない。ただ倫理的理由で食べないだけだ。ここで菜食主義の布教をするつもりはないが、わたしの菜食主義的傾向について少し述べておく必要がある。なぜならこれはすべて魂と関係があることなのだから。

一五歳の夏、スタンフォード大学の生理学研究室で、フリーデン機械式計算機のボタン押しのアルバイトをした(当時、コンピュータはキャンパス全体で一台しかなかった。科学者たちはほとんど誰もその存在を知らなかったし、まして自分の計算に使おうなどとは考えてもみななかった)。何時間もぶっ続けでそんな「数打ち込み」をするのはつらい仕事だった。ナンシーという大学院生の研究プロジェクトのためにそんな仕事をしていたのだが、彼女がある日、気分転換に研究所の別の種類の仕事に手を出してみる気はないかと声をかけてくれた。わたしが「喜んで!」と答えると、彼女はその日の午後、生理学の建物の四階に案内して文字通り実験材料のモルモットのケージを見せてくれた。閉じ込められた小さなオレンジ色の毛皮のモルモットのつんとする匂いや、ちょこまか動き回る様子をよく覚えている。

翌日の午後、わたしはナンシーに四階に行つて次の実験に使うモルモットを二匹取ってくるように頼まれた。しかしわたしに答える余裕はなかった。というのは、ケージのどれかに手を突っ込んで、すぐに殺されることになる小さな柔らかい毛皮の生き物を選び、二匹捕まえるところを想像した途端に頭がくらくらしてその場で気を失い、硬いコンクリートの床に頭を打ちつけてしまったのだ。正気を取り戻したときには、研究室のジョージ・ファイゲン主任教授の顔を見上げていた。教授はわたしの家族の古くからの友人だった。彼はわたしが気を失って倒れたときに怪我をしたのではないかと心配してくれたが、幸い何も怪我はなく、ゆっくりと立ち上がり、その日はもう仕事をやめにして自転車に乗って家へ帰った。それ以降二度と、科学のために犠牲にする動物を取ってくるようわたしに頼む人はいなくなった。

豚

不思議なことに、そのとき生き物の命を奪うという概念に真っ向から向き合つて大変な思いをしたにもかかわらず、わたしはその後何年も、ハンバーガーやそれ以外の肉料理も食べ続けた。そのことについて深く考えたとも思わない。わたしの友人もそうだったし、誰もそれを話題にしたりしなかった。知り合いの誰にとつても、肉食はまったく問題にされることのない当たり前の事実だった。恥ずかしながら告白すれば、当時わたしは「菜食主義者」という言葉に対して、ちょっと変わった堅苦しい道徳を振りかざす奇人というイメージさえ抱いていた(映画「七年目の浮気」には、このステレオタイプをとてもうまく表すマンハッタンの菜食主義レストランのシーンがある)。しかし、わたしは二二歳のときに「豚」と題する短篇小説にめぐりあった。両親がノルウェー移民のイギリス作家ロアルド・ダールによるその物語は、わたしの人生に大きな影響を与えた。そしてわたしを通じて、他の動物たちの命にも深く影響を及ぼすことになったのである。

「豚」の物語は軽妙で愉快な調子で始まる。主人公のレキシントンは叔母のグロスパン(ヴォルテール『カンディッド』に登場するパングロスのもじり)に厳格な菜食主義者として育てられたが、叔母の死後、自分が肉の味が大好きであることを発見する(もつとも、そのときは自分が食べているのが何であるか知らなかったが)。そこから先はダールの物語の常で、話は奇妙にねじれていく。

「豚肉」と呼ばれるおいしい食物に好奇の念を抱いたレキシントンは、友人の勧めに従つて屠殺場を見学に出かける。屠殺場の待合室には雑多なグループが待っている。一つずつグループが呼ばれて見学ツアーへと出かけていき、やがてレキシントンの番が来ると、彼は待合室から現場へと案内される。そこで彼は、移動チェーンに付いた鉤かぎに後ろ足を引っ掛けられた豚が次々と吊り上げられ、喉を切られ、血を噴き出しながら逆さ吊り

のまま「解体ライン」に乗せられ、煮えたぎった鍋に落とされて毛を剥ぎとられるのを目撃した。それから頭と足が切り落され、内臓が取り除かれ、ラップに包まれた清潔な小さなパッケージとなって国中のスーパーマーケットへと出荷される。そしてガラスケースに陳列されて、ピンク色の他のライバルたちと共に、客が来て吟味した末に購入して家に持ち帰るのを待ち受ける。

レキシントンがすっかり魅入られたように呆然と眺めていると、突然足を掴まれて上下逆さまに引っくり返される。気がつくとも自分もチェーンから吊り下げられて移動している。ついさっきまで眺めていた豚と同じに。冷静さを失って「おい！ 何をするんだ！」と大きな声で叫ぶ。しかし作業員たちはまるで気がつかないようだ。やがてチェーンは彼を人なつこそうな作業員のところへ運んでいく。レキシントンはこの不条理な状況に作業員が気がついてくれることを期待するが、その優しい屠殺係はぶら下がっている若者の耳を掴んで手元に引き寄せ、愛情のこもった優しい微笑みで彼を見つめ、それから鋭いナイフで巧みに頸動脈を大きく切り開く。若いレキシントンが思いもよらなかった逆さ吊りの旅を続ける間に、彼の強力な心臓は血を首から噴出させ、コンクリートの床へと滴らせる。上下逆さまに吊り下げられ、急速に意識を失っていくなかで、レキシントンは自分の前を進んでいる豚が一匹ずつ沸き立つ鍋の中へと落ちていくのを認める。

奇妙なことに、そのうちの一匹は前脚に白い手袋をはめている。そして彼は、手袋をした若い女が見学ツアーを待つ待合室で自分の一つ前のグループにいたことを思い出す。こんな奇妙な最期の思いにふけているうちに、レキシントンはくらくらしてきて、この世、「可能世界の中でも最も輝きに満ちたこの世界」から、あの世へとゆっくりとすべり落ちていく。

この物語の最後のシーンは長いことわたしの頭の中で反響し続けた。わたしは逆さになってブーブー哭いている豚になったかと思うと釣に吊られたレキシントンになったりして沸騰する大釜に……。

悔恨、開眼、改革

この恐ろしい物語を読んで一、二ヶ月後に、わたしは両親と妹のローラと共に岩のごつごつしたサルディニア島の南端の町カリアリを訪れた。父がそこで開かれた物理関係の学会で講演を頼まれたのだ。学会を地方面豊かに盛り上げるために、主催者がカリアリの町の外れにある公園で盛大なパーティーを催した。参加者の目の前で、生まれたばかりの子豚を丸焼きにして切り分けるという趣向だった。当然ながら、わたしたちは会議に招かれた者としてみな、このサルディニアの貴ぶべき伝統儀式に臨むことを期待された。しかし、ダールの物語の記憶も生々しいわたしは、この儀式に参加するなどとも考えられなかった。妹のローラもやはりその場面を想像して怖気をふるっていた。結局二人でホテルに閉じこもり野菜とパスタで大いに満足した。

ノルウェーの「豚」とサルディニアの子豚——この強力なワンツーパンチの結果、わたしは妹に続いて肉をまったく口にしなくなってしまった。革の靴やベルトを買うことさえやめてしまった。わたしはこの新しい反肉食主義の立場の強力な推進者となった。わたしの意見で友人の何人かを転向させることまでできたのが嬉しかった。もっとも、数ヶ月でみな自然に元に戻ってしまったが。

その当時、わたしは個人的に崇拜していたヒーロー、たとえばアルベルト・アインシュタインが、どうして肉を食べ続けることができたのか不思議でならなかった。最近ウェブ検索によって、どうやらアインシュタインは菜食主義に傾いていたらしい、それも自分の健康のためではなく、生物に対する共感に発するらしい、と知って喜んでいる。しかし、その頃はそんなことは知らなかったし、いずれにせよ他のわたしの多くのヒーローは事情を知りながら確信犯的に肉食を続けていた。それがどうしてなのか理解できず悲しかった。

帰帰、そして快進撃

とても奇妙なのだが、数年後にはわたし自身も、アメリカ社会の日々の生活の圧力を思い知らされて、一時はあれほど熱くなっていた菜食主義を断念してしまった。そしてしばらくの間、深く考えることもなくなっていた。六〇年代半ばのわたしだったら、そんなふうに戻ってしまうことは想像もできなかっただろう。しかしどちらのわたしもこの同じ頭蓋の中に宿っていた。それは本当に同じ人間と言えるのだろうか？

その後数年間はそんなふうになり、まるで菜食主義の啓示など何もなかったかのように過ぎた。インディアナ大学に助教として勤めるようになると、以前のわたしと同一ような理由によって同じような菜食主義哲学をもつに至ったとても思慮深い女性に出会った。彼女はわたしよりも長い間菜食主義を続けていた。スーとわたしは良い友人となり、彼女の態度の純粋さをわたしは尊敬した。そして彼女との友情によって、この問題をもう一度頭から考え直すことになった。わたしはたちまち「豚」読了直後の不殺生の立場に舞い戻った。

その後の数年間行ったり来たりしたあげく、三〇代終わりまでには最終的に一つの安定状態に落ち着いた。それはある種の妥協点であり、わたしの中で次第にはつきりと形作られてきた「魂のサイズには違いがある」という直観に対応している。もちろん明瞭とはいえない難かったが、もし魂が「十分に小さい」のであれば、わたしや他の人間のような「より大きな」サイズの魂の持ち主の欲望のためにそれを犠牲にすることが許される、というような漠とした考えをわたしは受け入れた。哺乳類のところで線を引くのはもちろん恣意的であるが（実際どこで線を引いても恣意的だ）、その後二〇年その線を守っている。

命をもたない肉の不思議

われわれは豚や牛を食べるのではなく豚肉や牛肉を食べる。鶏肉は食べるが鶏たちを食べはしない。以前、わたしの友人の娘さんがまだ小さかった頃に、農場でコッコと鳴いて卵を産む鳥を表す単語と夕食の皿の上に載っている物体を示す単語と同じだと大はしゃぎで父親に教えてくれたことがあった。彼女はこれおかしな一致は、「はし」が川にかかる橋とご飯を食べる箸のどちらも表すおかしな一致と同じく、偶然のものと思っただけだった。皿の上のおいしい物体とコッコと鳴く鳥が一つの同じものと知ったときに彼女がショックを受けたことは言うまでもない。

誰でもみな子供のときに、われわれの文化で可愛らしいとされているウサギ、羊、子牛などの動物を自分たちが食べていることを発見して、多かれ少かれ似たようなショックと混乱を体験しているだろう。わたしにも微かではあるが、この謎に関する混乱の記憶がある。しかし肉食はごく当たり前だったので、それ以上深く考えることはしなかった。

それでも、食料品店では時折この問題が鮮やかに浮かび上がった。大きな陳列ケースに奇妙な色でぬるぬるしたものがたくさん並べられていて、「肝臓」、「胃」、「心臓」、「腎臓」とか、時には「舌」あるいは「脳みそ」などとラベルが貼られている。動物の部分の名前のように聞こえるばかりか、まさに動物の部分のように見えた。幸いにも「牛挽肉」は動物の部分のようには見えなかった。「幸い」というのは、とてもおいしかったからだ。それを食べるのをやめるとは言われなくなかった。ベーコンもおいしかった。ベーコンは幸いにもとても薄く、料理してしまえばカリカリして、動物を思い起こすことはなかった。何と幸運だったろう！

しかし、食料品店の裏の荷卸し場では謎が仕返しのように戻ってくる。大きなトラックがやってきてバック

ドアを開けると、肉と骨の赤い巨大な塊が恐ろしげな金属の鉤からだらりとぶら下がっている。これらの死骸が店の裏から動かしやすいように鉤に吊されて、頭上のレールにそって店の中へと運び込まれるさまを病的なまでに好奇の目で見ていた。少年だったわたしは不安になり、死骸を見つめながら心の中で「あの動物はいたい誰だろう？」と問わずにはいられなかった。もちろん名前を問題にしていたわけではない。家畜には名前がないことくらい知っていた。もっと哲学的な疑問だった。「他のどの個体でもなくあの個体だったことでどんな感じがしたのか」。この動物が屠殺されたときに突然かき消された、他の誰のものでもない内なる光は何だったのか？

一〇代でヨーロッパを訪れたときにはさらに直截的な体験をした。命のない動物の身体が（たいていは皮を剥いで頭と尻尾を落とした状態だが、時にはそれらもあるままで）公衆の面前に堂々と陳列されていた。クリスマスの頃の食料品店でのことを今でもはっきり覚えている。通路の真ん中のテーブルに豚の頭がまるごと置いてあった。後ろ側から眺めると、首の内部の構造が、まるでギロチンで切られたように鮮やかな断面によって見てとることができる。身体の内ちこちの部分と頭の中の「司令部」^{ヘッドクォーター}とをつないでいた密なコミュニケーションラインがすっぱり切断されている。前側から眺めると、豚は独特の微笑みの表情を浮べていた。それを見てわたしはぞっとした。

またもやあの問いが浮かんできた。「あの頭にはいったい誰が入っていたのだろう？ 誰があそこで生きていたのだろうか？ 誰があの中から見ていたのだろうか？ 誰があので聞いていたのだろうか？ あの肉の塊は元はいったい誰だったのだろうか？ 男？ 女？」。もちろん何の答えも返ってはこない。しかも他の客は豚の頭になど何の関心も示さない。生とは何か、死とは何か、豚の自己^{ポークリタイ}とは何かといった疑問に、誰も一片の思いさえ向けていないように見えた。しかし、わたしの内部ではそうした疑問が猛烈に渦巻いていた。

蟻や蛾や蚊を踏みつぶしたときにも、時折同じ疑問を感じることもある。そんなに頻繁ではないが。おそろく「中には誰がいるのか？」という疑問は昆虫の場合には弱い意味しかもたないのだろう。それでも半分つぶされた昆虫が床の上をもそもぞと這っているのを見ると、いやでも魂探しをしてしまう。

こんな気味の悪いイメージをいろいろ持ち出したのは、決して菜食主義運動を推進するためではない。そんなことは読者の多くはすでに十分考えてきたことだろう。ここでわたしが伝えたいのは「魂」とは何か、誰あるいは何が魂をもっているかという重大な問いである。人は誰でも生涯を通じ必ずこの問いと関わりをもつ。少なくとも暗黙のうちに、しかし多くの人はきわめて明示的に。そして、この問いが本書の中心問題である。

出でよ、大きくどっしりした魂の者

すでに触れたことでご推察の通り、わたしはショパンの楽曲を深く愛している。一〇代、二〇代を通じてわたしはショパンのピアノ曲をずいぶん弾いた。ニューヨークのG・シャーマー社から出版されている明るい黄色の楽譜集をよく使った。各巻に一九〇〇年代初めのアメリカの批評家ジェームズ・ハネカーの手による「まえがき」が添えられていた。今日の読者の多くは、おそらくハネカーの散文を大げさすぎると感じるだろう。しかし、当時のわたしはそうは感じなかった。ほとぼしる情熱がショパンの音楽に対するわたしの理解とよく共鳴していた。今でも彼の文体と豊かな比喻が好きだ。ショパンの練習曲の巻のまえがきの中で、ハネカーは作品25の練習曲11番イ短調について（巨大な音の噴出のこの作品は「木枯し」の練習曲としばしば呼ばれる。ショパン自身がつけたタイトルではないし、ショパンの曲想とも異なっているが）、次のような驚くべき主張をしている。「魂の小さな者は如何に指が達者であろうと弾くべからず」⁽⁴⁾

この信じ難く沸き立つような作品の恐るべき技術的な難しさは、一六歳のときに果敢にも挑戦して残念ながら断念を余儀なくされたわたし自身の個人的な体験が身をもって示している。指定された速度で最初のページを弾くだけで（信じられないくらい根気強く練習を何週間も続けたあげく、ようやく弾けるようになったのだが）右手がひどく痛んだ。しかし、もちろんハネカーは技術的难度のことを言っているのではない。彼はこの作品について、きわめて正當に、莊重にして高貴と形容している。しかし、おそらくもっと物議をかますのは、彼が人間の魂のレベルあるいは「サイズ」の違いを区別する線引きを行っていることである。そして、誰もがこの作品を弾く資格があるわけではないと示唆している。それは、身体的な制約によるのではなく、魂のサイズが「十分に大きく」ないことに起因する（ハネカーの言葉（small-souled men）に含まれる性差別の批判には立ち入らない。当時はこれが当たり前の言い方だったから）。

この種の考えは現在の平等主義的アメリカではなかなか浸透しない。平均的な人々には受け入れられないだろう。率直に言えば、現代の民主主義的言論に馴れた耳にはきわめてエリート主義的で不快にすら響く。それにもかかわらず、ハネカーの主張になぜか自分が同調していることを認めざるを得ない。さらに、ごく大雑把に言って、「小さな魂」の人間、「大きな魂」の人間のような考え方にも正当性が認められると、実は誰もが暗黙のうちに信じているのではないだろうか。実際、われわれがいかに公には平等主義を標榜していても、わたしは実はこれが誰もが信じていることなのだと言わずにはいられない。

小さな魂の人間と大きな魂の人間

死刑を擁護する人々がいる。死刑場に通じる廊下で死刑囚がどんなに一生懸命慈悲を乞おうが、ガタガタ震

え叫び声をあげて必死に運命を逃れようとしようが、公にそして意図的に人間の魂を抹消する死刑を。

戦争では敵兵を殺すことが許されると、ほとんどの人は信じているだろう。まるで戦争が敵兵の魂のサイズを小さくしてしまったかのようだ。

昔は多くの人々が奴隷を所有売買して、ちょうど今日のわれわれが馬や犬や猫に対するように、一族を勝手にばらばらにすることに何の問題もないと信じていた（ジョージ・ワシントン、トマス・ジェファークソン、ベンジャミン・フランクリンはみな、細部に違いはあれ、少なくともある期間はそのように信じていた）。

宗教的な人々のなかには、無神論者や不可知論者や他の宗教の信者、さらに一番良くない「信仰」を捨てた裏切り者には魂がなく、したがって殺してしまってもいっこうにかまわないと信じている者もいる。

女には魂がないとか、もう少し寛容に、女の魂は男のよりも小さいと信じ込んでいる人々もいて、そのなかには女性もいたりする。

わたしもその一人だが、レーガン元大統領は実質的には亡くなるよりもずっと以前に「いなくなってしまう」と考えている人々がいる。同じようにアルツハイマー病末期の患者も、実質的にもういなくなってしまう。頭蓋の中にまだ脳はきちんとあるが、その脳からは何かが、その個人の魂の秘密を担っていた本質的な何かが消えてしまっている。「私」は完全にあるいは一部分が失われ、消えてしまって、二度と見つけることができない。

これまたわたしもその一人だが、受精したばかりの卵子も五ヶ月の胚も、完全な人間の魂をもつには至っていないと信じている人々がいる。それゆえ、母親の生命をその小さな存在の生命よりも「尊重」する。もちろん、後者が生きていることに疑いを差し挟む余地はないが。

チヨコレートブラドルのハッティ

ケリー リンが飼ってる七面鳥、あれまだ見たことがないから、朝食の後で見に行かない？

ダグ 七面鳥はあれ？ それとも彼女？

ケリー あれだわ。彼女じゃないわよ。

ダグ あ、そう……それじゃ、ハッティは彼女、それともあれ？

ケリー ハッティはもちろん彼女よ。

ゴールドデンレトリバーのオリ

ダグ グリフィ湖での昼間の散歩、オリは喜んでた？

ダニー うん、彼、喜んでたよ。他の犬とはあまり遊ばなかったけど。でも、人間とよく遊んでいたね。

ダグ 本当？ どうしてだろ？

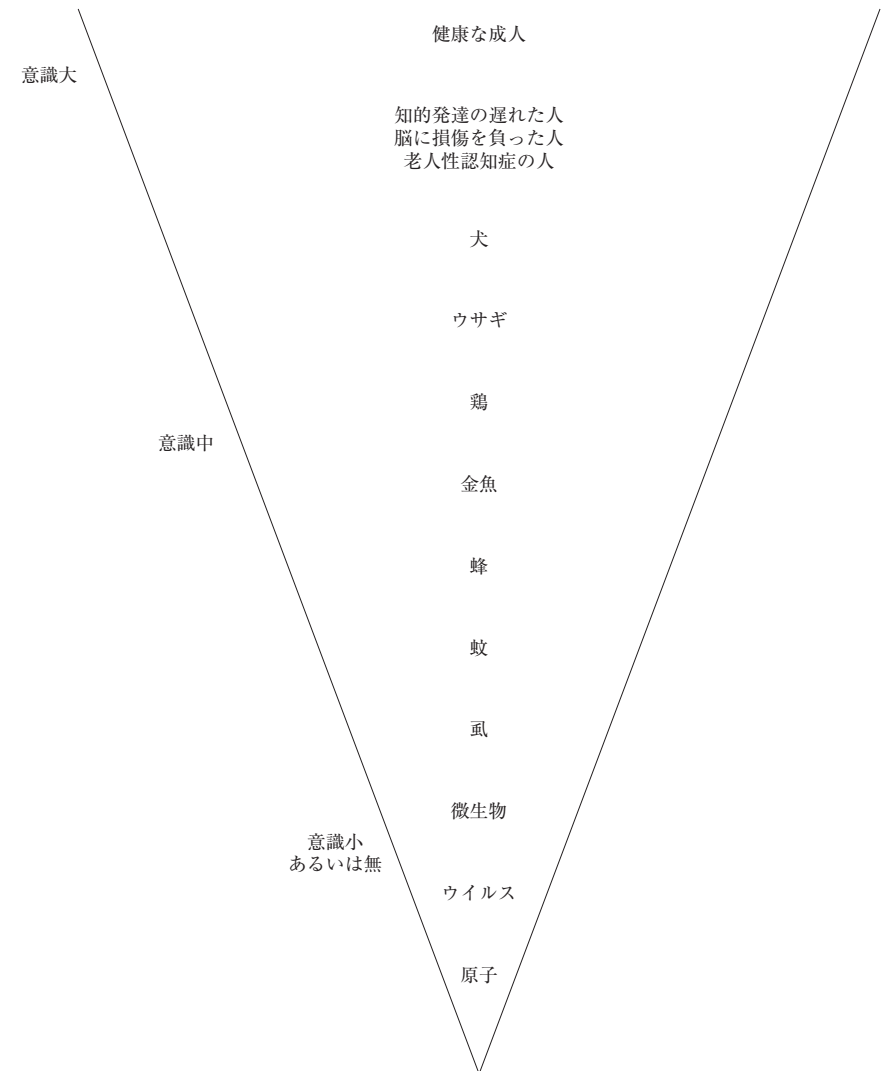
ダニー オリは社交家なのさ。

生と死を分ける運命の一線は？

少なくとも十分大きな魂の人間であれば誰でも、こういう問題にどこかで境界線を引かなければならない。蚊や蠅は殺していいか？ ネズミ捕りをしかけてもいいか？ ウサギやロボスターや七面鳥や豚を食べるか？

犬や馬はどうか？ ミンクの毛皮や象牙の彫刻を買うか？ 革のスーツケースや鱔皮のベルトを使うか？ 自分の身体に侵入した細菌に対してペニシリンで攻撃をしかけるか、などなど。世界は常に大小さまざまなジレンマに満ちあふれており、われわれは決断を迫られる。最も身近なところでは、食事のたびごとに。子羊に問題にすべき魂はあるのか、それとも、そんなことで頭を悩ませるにはラムチョップはおいすぎるのか？ 餌につられてナイロン製の釣糸の先で空しく飛び跳ねている鱒に生存権はあるのだろうか？ それとも、頭を一撃して「苦しみから解放」してやり、うまく言えないけれど不思議なことに予測できるあの柔らかくて弾力のある白い身を味わうべきなのか？ バッタや蚊、さらには細菌の体内には、どんなに微かにでも小さな小さな「光」が灯っているのだろうか？ それとも「そこ」(どこのことだ？)は真つ暗なのだろうか？ なぜわたしは犬を食べないのだろうか？ 朝食に味わったベーコンの元になった豚は誰だろうか？ 今かぶりついているトマトはどのトマトだろう？ 庭の大きな榆の木を伐り倒すことは許されるだろうか？ あの野生のブラックベリーの茂みは引っこ抜いてもよいだろうか？ その横の雑草はどうだろうか？

いったい何が、われわれ言葉をもつ存在に、言葉をもたない生き物たちの生死を決定する権利を与えたのだろうか？⁽⁵⁾ なぜわれわれは(少なくとも一部の人々にとって)、そのような苦悩に身を置いているのか？ 突き詰めて考えてみれば、それは単に**力は正義**なりだからだ。われわれ人間は、複雑な脳と豊かな言語および文化によって利用可能になった知能のおかげで、他の「低級な」動物(植物)に比べ、確かに高等でより大きな力をもっている。その力に支えられてわれわれは、自分一人でじつくりと熟慮した結果にせよ、単純に世の流れに従っているだけにせよ、生き物にある種の序列を想定するようになっていく。蚊を殺すのと同じように気軽に牛を殺すことができるだろうか？ 壁にとまっている蠅を殺す方が肉切り台の上で震える鶏の首をはねるより楽だろうか？ 言うまでもなく、こうした疑問にはいくらでも食らいつくことができるが(なにせ位付け



の話なのだから)、もうここでやめておくことにしよう。

図に示したのは、わたし自身の個人的な「意識の円錐」である。もちろん厳密なものではなく、およそそのアイデアにすぎないが、何らかの同じような構造があなたの頭の中にもあるのではないか。はつきりと整理されることすらないので、厳密な吟味の対象にもまずならないが、言葉を使う能力を与えられた人間ならば、誰でも備えている構造だと思う。

内面性——何に、どの程度あるのか？

本書の読者であれば、まさか「スター・ウォーズ」シリーズを見逃していることはあるまい。あの忘れ難いキャラクター、C-3POとR2-D2が出ている映画だ。これら二体のロボットは馬鹿馬鹿しいほど非現実的である。特に、コンピュータに人間の知能のきわめて単純な側面だけでも何とか伝えようと、何十年にもわたって努力してきたわたしのような人間から見ると。それでもこのキャラクターたちは、とても価値のある役割を一つ果たしている——われわれの心を開いてくれるのだ。C-3POとR2-D2がスクリーン上で「血肉を備えて」活躍しているのを目にすれば、われわれが金属やプラスチックで作られたものを見ると反射的に「あれは『誤った素材』でできているんだから生き物でありっこない⁽⁶⁾」という、お決まりの結論に飛びつくわけではないことに気づかされる。むしろ、肉からは程遠い冷たくて硬いものからできていながら、考え、感じる存在を容易に想定できることに気がつき、自分でもびっくりしてしまう。

「スター・ウォーズ」には、何百体ものロボットの軍隊がそろって行進をするシーンが出てくる。ここで「そろって」というのは、**本当に**一様である。全員が完全に同期して動き、全員が完全に同じで受動的、空疎で

機械的な表情をしている。そしてこのきわめて明確に表現された絶対的な交換可能性の印象のおかげで、このシーンを見る観客は、爆弾が落ちてこの何百もの工場生産の「生き物」が一瞬にして粉々に吹き飛ばされるのを見ても、何の悲しさも感じることはない。C-3POやR2-D2とはまったく対照的にこれらのロボットは生き物などではあり得ない。単なる金属の塊にすぎないのだ！ 缶切りや車や戦艦が内面性をもたないように、金属の殻の内部には何の**内面性**も存在しない。それはそのロボットたちが互いに区別がつかず、完全に同じであることから明らかだ。あるいはもし万が一、内部に**わずかな内面性**があつたとしても、それは蟻がもつ内面性と同程度だろう。これら金属製の行進者たちはただの兵隊ロボットで、ロボットの大きなコロニーにおいて働き蜂の役割を果たしているにすぎない。回路に組み込まれた固定的で機械的な衝動に従って、ゾンビのように動いているだけだ。仮に内面性を備えているとしても無視できるレベルでしかない。

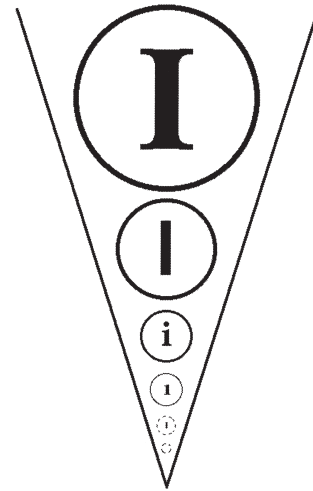
それでは、C-3POとR2-D2に「内なる光」があるという確信をわれわれに与えるものは何だろうか？ それらの無機的な頭蓋の中に、愛嬌のある丸い「眼」の背後に、本物の内面性があると思わせるものは何か？ それらに「私」を否定なく感じるのはどうしてだろうか？ 反対に、レーガン元大統領の晩年や、爆弾で吹き飛ばされた画一的な兵隊ロボット集団に欠けているものは何だろうか？ チョコレートブラドルのハッティやロボットのR2-D2では欠けていない、そしてそのために大きな違いをもたらすもの、それはいったい何だろうか？

魂のゆっくりした成長

わたしはすでに、精子と卵子とが結合して人間の受精卵ができた瞬間に完全な人間の魂が作られるという考

えには与^{くみ}しないと述べた。そうではなくわたしは、人間の魂は何年にもわたる成長の過程でゆっくりと形作られていると信じている。ところで、本書の目的の一つは、この捕まえにくく、ずれやすく、そしてしばしば宗教的な意味合いに満ちた（本書ではそのような意味合いは一切ないが）「魂」という言葉でわたしが何を意味するのかを明らかにすることにある。ここで少し間抜けに感じられるかもしれないが、少なくとも比喩的な意味で、「魂度」という数値スケールを考えることを提案したい。0から100までの値をとり、単位は「ハネカー」とでもしよう。読者よ、あなたとわたしはどちらも魂度100ハネカーだ。握手をしようじゃないか！ おっと、しまった。我が国の敬うべき平等主義の伝統に長年にわたって導かれてきたせいで、わたしは過ちを犯してしまったようだ。無意識のうちに、魂度には「最大」があり、通常の成人はすべてその値で止まると仮定してしまった。なぜそんな仮定が必要なのだろうか？ 魂度は身長みたいなものではないのだろうか？ 成人には平均身長というものがあるが、実際の身長はその平均のまわりに大きくばらついている。同じように、成人の平均魂度（たとえば100ハネカー）があり、そのまわりに幅がある、たとえば（IQのように）上は150からまれに200ハネカー、下は50あるいはそれ以下というのはなぜいけないのだろうか？ もしそれで良しとするならば、読者もわたしも100ハネカーという先ほどの主張は撤回する。その代わりに読者もわたしも魂計の測定値はもつとずつと上だと言いたい（同意してもらえたとよいのだが！）。しかし、どうやら倫理的にやや危うい領域に近づいているようだ。まるで一部の人々が他の人々より価値があると主張しているととられてしまうかもしれない。そのような考えはわれわれの社会では許されない（わたしにとっても性に合わない）。個人の魂度をハネカーで測る話はこれでやめにしよう。

精子が卵子と結合したときにその結果として出来上がる非常に小さな生物学的な塊の魂度は、0ハネカーのようにわたしには思える。しかしながらそこで誕生したのは、活力に満ち、雪だるま式にふくれあがる存在で



あり、それは数年かけて複雑な内部構造あるいはパターンを
発展させることができる。そしてこの存在（より正確には、
この存在がゆつくりと段階的に成長していったときの各状態。
それらは受精の瞬間よりもはるかに複雑だ）には、パターン
がより精細になるにつれて、ハネカー尺度上でより高い魂度
が与えられ、最終的におよそ100の値に収束する。

上に示す円錐図は、○歳から二〇歳の人間の（あるいは一
人の人間の成長の各段階における）ハネカー値がおおよそど
うになるかとわたしが考えているかを、わかりやすく示し
たものだ。

つまり、ここでわたしが主張したいのは、ジェームズ・ハ
ネカーの挑発的な言葉を敷衍して、「魂度」は決してビット
や画素あるいは通常の電球のようにオン／オフ、白／黒で二
つの値のどちらかをとる離散的な変数ではないということだ。
そうではなく、魂度は陰影のあるもやとした数値変数で、
異なる種や異なる物体の間で連続的に変化する値をとる。そ
してその値は、対象となる存在に備わる特殊で精妙なパター
ンの成長や衰退の結果、時間とともに上がったり下がったり
する（本書の大部分はそのパターンの性質の解明に費やされ

ている）。さらにわたしは、人々が無意識のうちに有している偏見の背後にも数値変数があると主張したい。
ある食物を食べるか食べないか、ある服を購入するかしないか、ある虫を叩きつぶさるかつぶさないか、SF映
画のロボットに同情するかしないか、映画や小説の登場人物が悲劇的運命にあつたときに悲しいと感じるか感
じないか、とある老化現象を示す人のことを実質的に「いなくなってしまう」と思いか思わないかなどなど、
これらの偏見は、本人が認めようと認めまいと、まさにこのような数値的連続性に基づいている。

人間の発達の間における「魂度の違い」を露骨に表した円錐図を見た読者は、もし強力な圧力を加えられ
たら（映画「ソフィーの選択」のように）、わたしは二〇歳の大人の命を救って二歳の子供の命を奪うという
選択をすると思われるかもしれない。答えはノーだ。二〇歳は二歳に比べてずっと多くの魂をもっているとい
わたしは本気で信じている（おそらく読者の一部がこの考えに困惑することは承知しているが）。それにもか
わらず、二歳の子供にはその後の一〇数年の間にもっとずっと大きな魂を**発達させる可能性**があることに深い
敬意を感じる。加えて、数十億年にわたる進化を通じて、われわれは二歳児に対して、他に良い言葉が見つ
からないのでこう言うが、「かわいらしさ」を知覚するようになっていく。そうして知覚されたその特性によ
て、二歳の子供には驚くほど強力な防護壁が与えられる。それはわたしばかりでなく、年齢、性別、職業を問
わない、あらゆる人間による攻撃から子供を守ることになる。

明かりは灯っているか？

本書の目的の中心にあるのは、ここまで「魂」とか「私」と呼んできたものの根底をなす、あるいはそれら
を生じさせるとわたしが信じている、「特殊で精妙なパターン」の本質を突き止めようという試みである。

「魂」や「私」という言葉は、「内なる光が灯っている」とか「内面性を有する」、あるいは使い古された「意識をもつ」と言い換えてもよい。

心の哲学者たちは「志向性を有する」（信念や欲望や怖れなどをもつという意味）とか、あるいは「意味論がある」（物事について真に考える能力をもつという意味。無意味な印を複雑に操るだけの能力と対照される。この違いについては私家版ソクラテスとプラトンの対話で触れた）という表現を用いる。^⑦

これらの用語はそれぞれ、ここで問題とする捉え難い抽象物の少しずつ異なった側面に着目したものであるが、わたしにとってはほぼ交換可能である。そして、これらすべての用語に関して、それらは連続的な尺度上の程度として理解すべきであるという点を再度強調したい。オン／オフ、白／黒、イエス／ノーのようなスイッチとしてではなく。

追記

二年前に書いた本章の第一稿では、肉食や菜食主義の話題には軽く触れただけだった。その数ヶ月後に「豚」の物語を要約しながら原稿に「肉付け」をしていたときに、突然それまで二〇年間にわたって（時には不快な思いをしながらも）維持してきた境界線にフラフラと疑念が湧いてきた。哺乳類とそれ以外との間の境界線だ。

そうなると、鶏肉や魚を食べるのも不快に感じるようになってしまった。それまで二〇年間食べ続けてきたにもかかわらず。そして、わたしは突然転向してしまった。食い改めたと言ってもいいかもしれない。偶然にも、二人の子供もほぼ時を同じくしてわたしとは独立に同様の決断を下したために、わずか二週間くらいの間

に我が家の献立は完全な菜食へと変貌するに至った。二一歳のときにサルディニア島で得た境地と同じところへと立ち戻ったわけで、これからもこの場所にとどまろうと思う。

結局、本章の執筆は予期せざるブーメラン効果を著者のわたしに引き起こしたことになる。後の章において見るように、このような選択の予期せざる後戻り、そしてその効果の自己モデルへの取り込みは、「わたしは不思議の環」というモットーの意味を示す優れた例なのだ。